

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：特別研究員奨励費

研究期間：2007～2009

課題番号：19・2833

研究課題名（和文）

乳がん患者と家族の関係性の向上を目指した心理支援プログラムの開発

研究課題名（英文）

Development of a psychological support program aimed to improve relationships between breast cancer patients and their families

研究代表者

塩崎 麻里子 (SHIOZAKI MARIKO)

近畿大学・国際人文科学研究所・助教

研究者番号：40557948

研究成果の概要（和文）：

乳がん患者を対象とした質問紙調査を実施し、配偶者からのサポートでうまく機能していないネガティブサポート(過剰関与・問題回避・過少評価)が患者の心理的適応に及ぼす影響に関する縦断的検討を行った。第一に、ネガティブサポートは治療過程において変化すること、第二にネガティブサポートの心理的適応への悪影響は、その後の心理的適応に影響すること、第三にネガティブサポートの心理的適応への影響は、患者の個人特性によって緩衝されることが明らかとなった。結果から、両者のダイナミズムを考慮したネガティブサポートに対する早期支援方法を提案した。

研究成果の概要（英文）：

The present longitudinal questionnaire study was conducted in order to examine the effect of negative spousal support (overprotection, encouragement, and management) on the psychological adjustment of breast cancer patients. Our results indicate that, firstly, some negative support could be changed through the course of treatment. Secondly, the influence of negative support on patients promoted subsequent psychological maladjustment. Thirdly, certain individual factors of patients served to buffer against psychological maladjustment influenced by negative support. These findings indicate the need for early intervention for negative support, in addition to a new psychological support program considering the relationship between breast cancer patients and their spouses.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
年度	1,100,000	0	1,100,000
年度	1,100,000	0	1,100,000
年度	1,100,000	0	1,100,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	0	3,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：ソーシャルサポート・乳がん患者・家族・心理的適応・心理支援

1. 研究開始当初の背景

がんは日本人の死亡原因の第一位を占め、現在では、その約3割を占めるに至っている。がん死を減らすための対策は、がんにならないための一次予防、早期発見・早期治療によるがん死亡を防ぐ二次予防、そして、QOL (Quality of Life) を向上させ、再発・転移を防ぐ三次予防の3つの段階がある。現在、がん予防に関する情報や高度な検診が普及しつつあり、がんの治癒率や生存率の急速な向上につながった。その結果、多くのがん患者は長期間がんと共に生きることとなり、がんの三次予防が注目されるようになった。

しかし、三次予防の対象となる慢性ストレス期にあるがん患者は、医療機関への関わりが激減することが多く、特に、QOL の概念の導入によって注目された心理社会的問題に対する支援に関しては、その重要性は認められているものの、医療システムの中で支援体制が組み込まれにくいという問題が存在する。そのため、患者と家族が相互にサポートし合うことを支援の一単位とし、慢性ストレス期にあるがん患者のQOLを向上させる支援システムを整備・構築していくことが注目されている。

2. 研究の目的

本研究では、患者と家族を一単位とした援助方略を提案することを目指し、ソーシャルサポート研究の枠組みで患者と家族のサポートを検討することとした。特に、うまく機能していないサポート資源を有効活用する視点にたち、術後補助療法を受ける乳がんを対象として、

配偶者からのサポートでうまく機能していない「ネガティブサポート」を取り上げて、以下の3点を検討した。なお、ネガティブサポートは、著者らの研究によって、下位因子として、過剰関与・問題回避・過少評価が存在することが明らかになっている。

①患者が配偶者から受けていると認識しているネガティブサポートの頻度の時系列変化を示す。

②ネガティブサポートが患者の心理的適応に及ぼす影響の経時的変化を明らかにする。

③ネガティブサポートの心理的適応への影響を、他者依存性という個人要因が緩衝しているかどうか検討する。

3. 研究の方法

調査協力に同意の得られた大学病院で外科的手術を受けた乳がん患者201名に対して、郵送法によって、術前・術後1ヶ月・3ヶ月・半年・1年・2年の6時点のQOLを追跡する質問紙調査を行った。また、医療従事者である共同研究者によって、患者の属性や疾病に関するカルテ情報を収集した。

主な調査項目は、ネガティブサポート項目、性格傾向 (NEO)、感情抑制傾向、ソーシャルサポート (サポート数・サポート満足感)、心理的適応 (HAD) 患者属性 (年齢・化学療法の有無・術式、腋窩の郭清状況、リンパ節転移の数) であった。

分析には、相関分析、X²乗分析、多変量分析 (重回帰分析・ロジスティック回帰分析・構造方程式モデル分析・多母集団同時分析) を用いた。

4. 研究成果

①患者が配偶者から受けていると認識しているネガティブサポートの頻度の時系列変化を示すため、縦断的調査の6時点のうち、入院時 (T1;N=201), 1ヶ月後 (T2;N=196), 半年後 (T3;N=196) のデータを用いて、解析を行った。配偶者からのネガティブサポートの中で、過剰関与と問題回避は時間の経過に従って減少するサポートであり、過小評価は変化しないサポートであることが示された。また、各時点でのネガティブサポートが心理的適応に及ぼす影響を検討したところ、3時点ともに問題回避のみが有意な影響を及ぼしていた (T1: $\beta=0.27, p<0.01$; T2: $\beta=0.34, p<0.01$; T3: $\beta=0.27, p<0.01$)。配偶者が問題回避的であると報告していた患者には、NEOによる性格傾向に特徴はなかったが、感情抑制傾向が強いことがわかった ($r=0.27, p<0.01$)。このことから、否定的な感情を抑制する傾向の強い患者は、配偶者が問題回避的であると評価していることになり、二者間の問題回避は、どちらか片方ではなく両者のダイナミズムの問題として捉える必要があることが示唆された。

②ネガティブサポートが患者の心理的適応に及ぼす影響の経時的変化を明らかにするため、ネガティブサポート、全般的なソーシャルサポート (サポート数・サポート満足感)、心理的適応に関して、手術前・1ヵ月後・3ヵ月後の3時点でのデータを用いて解析を行った。

まず、各変数と年齢を独立変数として、適応障害の基準を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、術前 (N=97) は、問題回避ネガティブサポートが有意傾向となった (OR=2.15, $p<0.10$)。また、1ヵ月後 (N=75) は化学療法の有無 (OR=2.52, $p<0.10$) が、3ヵ月後 (N=56) は問題回避ネガ

ティブサポート (OR=2.52, $p<0.10$) が有意傾向となった。

次に、問題回避ネガティブサポートに着目し、各時点でのサポートが各時点の心理的適応得点に及ぼす影響と、前の時点のサポートがその後の心理的適応に及ぼす影響を考慮したモデルを構築し、構造方程式モデル分析を行った (Fig1)。その結果、術前的问题回避ネガティブサポートが術前の心理的適応に影響し ($B=0.25, p<0.05$)、術前の心理的適応が術後の心理的適応に影響を及ぼしている ($B=0.41, p<0.05$) ことが示唆された (X²乗値=12.56, $p<0.01$, CFI=0.96, RMSEA=0.14)。

これらの結果から、乳がん患者の術後6ヶ月の心理的状态は、術前の心理的状态によって予測され、術前の心理的適応には親しい他者との関係性が影響すること、また、術後6ヶ月の心理的状态は、それ以前の心理的状态や対処などによって説明されるため、早い段階で悪循環を止めることが重要であることが示唆された。

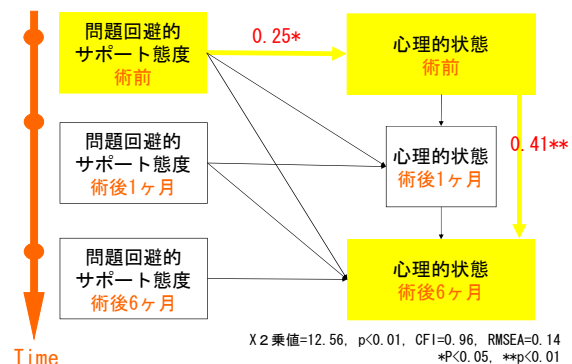


Fig 1 問題回避的サポート態度の長期的影響

③ネガティブサポートの心理的適応への影響を、他者依存性という個人要因が緩衝しているか検討するため、他者依存性の個人差が顕著になると考えられる術前データを用いて解析を行った (N=150)。解析に用いた項目は、患者の属性、ネガティブサポート、心理的適応 (HADS) であった。

他者依存性得点の平均値で分けて、高群 (N=74) と低群 (N=76) に分類した。群間で、年齢、術式、腋窩の郭清状況、リンパ節転移の数に違いはみられなかった。各群で、ネガティブサポートが心理的適応に及ぼす影響を検討したところ、低群においてのみ問題回避ネガティブサポート ($\beta=0.50, p<0.01$) と過少評価ネガティブサポート ($\beta=-0.23, p<0.10$) が心理的適応に有意な影響を及ぼしていた。多母集団同時分析を用いて、各群におけるパラメーター間で差がみられるか検討したところ、問題回避的サポートには 5% 水準で、過少評価的サポートには 10% 水準で有意な差がみられた。

他者依存性によって、ネガティブサポートが心理的適応に及ぼす影響が異なることが示された。今後は、サポートの受け手の特性によってサポートの効果が異なることだけでなく、サポートの文脈やサポートの送り手の特性を考慮して検討していく必要性があることが示唆された。

3 つの目的によって得られた成果から、患者と配偶者の両者の視点にたった早期の心理支援ツールを開発し、乳腺外科のある病院やクリニックの外来、ホームページ、患者会などで情報発信する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

①平井 啓・塩崎麻里子 (2007). がん患者に対する問題解決療法 緩和医療学, 10, 37-42.

②Shiozaki, M., Hirai, K., Dohke, R., Morita, T., Miyashita, M., Sato, K., Tsuneto, S., Shima, Y., & Uchitomi, Y. (2008). Measuring of the regret of bereaved family members regarding the decision to admit cancer patients to palliative

care units. *Psychooncology*, 17, 926-31.

③塩崎麻里子 (2008). 遺族の後悔尺度—ホスピス・緩和ケア病棟への移行時における意思決定の評価 緩和ケア, 18, 168-170.

④Akechi, T., Hirai, K., Motooka, K., Shiozaki M., Chen, J., Momino, K., Okuyama, T., Furukawa, T. (2008). Problem-solving therapy for psychological distress in Japanese cancer patients: preliminary clinical experience from psychiatric consultations. *Japanese Journal of Clinical Oncology*. 38, 867-70.

[学会発表] (計 29 件)

① 塩崎麻里子 がん患者の心理的適応に他者との関係性が及ぼす影響 岩満優美・平井啓・尾形明子・大谷弘行・鈴木伸一 サイコオンコロジー (4) - がん患者の感情 日本心理学会 (2007/9) 東京

② 塩崎麻里子・平井啓・所昭宏・小山敦子・乾浩己 乳がん患者の心理的適応に親しい他者のサポート態度が及ぼす影響：侵入症状と回避的対処を媒介変数とした検討 日本サイコオンコロジー学会 (2007/11) 札幌

③塩崎麻里子 がん患者の精神的健康に重要他者からのサポートが及ぼす影響—ありがた迷惑なネガティブサポート研究を中心に— 日本心理学会(2008/9) 札幌

④ 塩崎麻里子・平井啓・所昭宏・小山敦子・乾浩己 乳がん患者の心理的適応に親しい他者のサポートが及ぼすネガティブな影響：他者依存性の緩衝効果 日本サイコオンコロジー学会 (2008/10) 東京

[図書] (計 1 件)

① 塩崎麻里子 (2008). 問題解決療法の有効性を支持する根拠 不安と抑うつに対する問題解決療法 明智龍男・平井啓・本岡寛子 (監訳) ローレンス・マイナーズウォリス (著) 金剛出版.